

---

# 地すべり・土石流の考古学(1)

山形県西川町山居遺跡・水沢館跡遺跡

---

Archeology of Landslide and Debris Avalanche (1): Cases of the Sankyō and Mizusawa Sites in Nishikawa Town, Yamagata Prefecture, Northeast Japan

## 阿子島 功

【要旨】山形県の出羽丘陵では山岳横断道路建設などともなうて、考古学遺跡の広い範囲の発掘調査が行われるようになった。そして、地すべり・土石流によって形成された地形の活動履歴を、考古学的発掘手法と考古学遺構・遺物による年代決定によって明らかにできる例が増えつつある。

歴博シンポジウムのポスターセッションにおいて山形県内からその6例を示したが、ここでは2例を記載した。この地域の丘陵斜面における正規の侵蝕作用は地すべりであるといつて過言ではない。認識できる地すべり地形の時代的下限、すなわち現在見られる地形はいつ成立し、更新されているのかは地形学上の重要な問題であるが、判断の根拠となる編年材料はあまり知られていなかった。

山形県西川町山居遺跡は、地すべり緩斜面(移動土塊)上の縄文時代中期の住居跡群であり、4条の地割れ跡の凹地を遺物捨て場としている。地割れ凹地の埋積層の最下部のC14年代から、住居群は地割れ形成からあまり時間をおかないで立地した。また地割れ凹地の基底に再度の地割れもみこみは観察されなかったから、約5,000年間は安定であったことが推定できる。

西川町水沢館跡遺跡のうち、丘陵の地すべり緩斜面では、4条以上の地割れ跡があり、地割れ凹地基底に旧地表土がもみこまれているのが観察された。旧表土のC14年代や考古遺物から約2,700年前、約600年前以降、近世、現代と繰り返し活動したことが復元できる。これらの遺跡において、約5,000年前と約2,700年前の地割れ凹地は埋もれきつておらず地表で認識できる。

考古遺跡が営まれた期間の被災状況を復元できる場合が狭義の災害考古学であるが、遺跡周辺の地形変化(地変)の履歴を考古学的発掘手法によって明らかにできる場合を災害考古学と呼びたい。

### 1. はじめに——わが国の“災害の考古学”研究小史

考古学において災害史の認識は、16Cからのイタリアのポンペイ、19C初めの菅江真澄による秋田県米代川流域(大館市胡桃館遺跡の対岸の鷹巣町小藤田)の“埋没之家居”の記載のように、はやくからなされていたと思われる。埋もれた生活の復元が考古学の主たる研究対象であるなら、災害は生活のなかの重要な出来事である。ときには遺跡の廃絶の理由を説明するであろう。

体系的な発掘調査によって過去の地変(地形学においては地形変化)の痕跡が検出され記載された例は、表1のように1970年代からが多い。表1は人の生活にかかわる災害の痕跡には限らないで、地変の痕跡が発掘によって証明された例を挙げている(表中の報告の出典は阿子島ほか、1989に示したので省略)。地変の種類としては噴砂、地震による建物倒壊、活断層による遺構の切断・変位、地すべりによる埋没、火山噴出物による埋没、洪水による埋没など、ほとんどがそろっているとしよう。証明しにくいのは、落雷であろうか。